

西川和子著

『宮廷人ベラスケス物語』

（彩流社、2015年）

評者 坂東省次

スペインは「絵の国」といわれる。それほどにこの国から多くの巨匠が輩出している。彼ら多くの巨匠の中でも代表格はベラスケスであり、ゴヤでありそしてピカソである。ところが妙なことに、ゴヤとピカソに関しては日本で数多くの本が出版されているが、「画家の中の画家」と呼ばれるベラスケスに関しては出版数が極めて少ない。そんな穴を埋めるべく格好の本がこの度出版された。題して「宮廷人ベラスケス物語」。本書はベラスケスの62年の生涯を、数々の名画を紹介しながら、読みやすくかつ興味深く物語っている。

ベラスケスの生誕の地は南部アンダルシアの都市セビリアである。当時セビリアはイベリア半島における新大陸との貿易の中心地であって、繁栄を謳歌していた。彼の生まれた年1599年は、フェリペ3世治世の時代、ベラスケスが活躍するのは次のフェリペ4世治世の時代である。

ベラスケスはセビリアでまず画家で文化人のフランシスコ・パチーコと出会う。この師匠との出会いは、画家ベラスケスの将来を決定付けたと思われる。師匠の娘と19歳で結婚して活躍の場は首都マドリッドへ。王や王女の肖像画を描くことを夢見ていたというベラスケスは20歳代で幸運にも宮廷画家になり、エリートコースをまっしぐらに上りつめたのである。ただ、われわれ一般人は宮廷画家というのは絵を描いて日々を過ごすと考えがちだが、ベラスケスの場合、1623年に宮廷画家になった後、宮廷取次官、宮内警吏、王の衣装係、再計測記録主任、王室侍従代、王室所蔵品管理官、王宮の八角堂管理官兼会計官、スペイン王の作品購入官、そして王宮配室長といったじつに多くの肩書きを与えられ、王のために数々の仕事をこなす立場におかれた。

例えば、1659年、フランス王ルイ14世とスペイン王女マリア・テレサの結婚式がスペインとフランス国境を流れスピダソア川の中州のよう

な小さな島「フェイザン島」で挙行されたが、結婚式を実質的に運営したのは王室配室長ベラスケスであった。結婚式を無事取り仕切ったベラスケスは、その疲れから病に倒れ、1660年7月に62歳で帰らぬ人となったのであった。

宮廷で国王に仕えて多忙を極めたベラスケスが後世に残した作品数は決して多くはなかったが、そんななかでも数々の名作を残し、そこには謎の多い名作もいろいろと含まれている。その一つが傑作「ラス・メニーナス」である。この絵の中の画家ベラスケスの衣服の胸に、サンティアゴ騎士団員の印が描きいれている。本書第8章「貴族への道」は、ベラスケスがいかにしてサンティアゴ騎士団員となり、押しも押されぬ貴族になったかが実に興味深く書かれている。貴族になるには、気の遠くなるような身辺調査が行なわれる。著者はそのプロセスをじつに詳細に書いている。それを読者は興味深く読み進めてゆくだろう。完璧な身分証明ができないベラスケスは、果たして騎士団員に認められるのか。そこで登場するのが国王フェリペ4世の愛の手であり、ベラスケスは無事、貴族の仲間入りを果たすのである。

「ラス・メニーナス（宮廷の女官たち）」の謎に対しては、歴史上、数多くの解釈が行われてきた。最終章の第9章「謎多き二枚の大作」で著者は、「織女たち」と「ラス・メニーナス」の謎解きに挑んでいる。後者「ラス・メニーナス」の謎を解くに当たって、著者はこの絵をいろいろな角度から、つまり「いったい、いつ、描かれたのか?」、「どんな人たちが描かれているの?」、「この部屋はどんな部屋なの?」、「鏡の中の鏡には、何が映っているの?」などといった角度から見て、こんな結論に達している。「ラス・メニーナス」は、ベラスケスが自らのアトリエで描いた、マルガリータ王女を中心にした、国王の家族絵だったというのである。

ばんどう しょうじ（教授・日西交流史）